

## 秋田藩戊辰戦争における百姓の動向について

国 安 寛

### 1 はじめに

いまさら指摘するまでもなく、秋田戊辰戦争にかかわる資料の発掘や分析は、兵力・作戦・軍事行動などを中心に戦争の経過を詳細に実証し、それなりの成果をえている。

しかし、それは武士を視点とするものであって、大部分をしめる百姓の視点からまとめあげたものではない。この点に関して早くから警告しつつ去った鎌田永吉氏の業績があるし、筆者も若干のべたことがあった。

今回、とくに鎌田氏の論を展開する余裕がないので、新しく発見した資料に検討を加え、今後の資料の発掘・実証そして論理の展開の土台としたい。なお、これらの作業が博物館の展示活動の基礎作業とも考えている。

### 2 秋田藩戊辰役軍功賞典録について

秋田藩の『戊辰役軍功賞典録』<sup>3)</sup>(以下『賞典録』という)は、明治2年にまとめ、さらに明治4年に再調査の上成立したようである。この『賞典録』は(一)・(二)・(三)の3冊となっており、(一)・(二)と(三)の一部が武士クラスで、やく1,100件(卒・社人・僧・一部郷士を含む)、また庶民クラス845件は(三)に町村名を付して収録されている。

第1表はその庶民クラスを郡毎・村毎に並べ変えたものである。さらにそれを郡毎に賞の内容別に集計したのが第2表である。まず受賞の内容をみると、賞言が圧倒的に多く全体の81.5%をしめる。ついで一人扶持・死去(戦死)による一人扶持・手負(負傷により廃人同様)となっている。そのほか少数ながら二人扶持・紋付上下・永帯刀などがある。つぎに地域別にみると、秋田郡の39.2%について仙北郡の36.3%が多く、ついで山本郡・雄勝郡・平鹿郡・河辺郡は10%以下で少ない。もちろん、秋田・仙北両郡は大郡であり、しかも戦場となっている。しかし、上記両郡と平鹿・雄勝郡は石高・戸数においても<sup>5)</sup>また戦場となっている点でもこのような差はないと判断される。やはりこの差は戊辰戦争に対する功績の評価を考えるのが妥当であろう。比較的件数の多い村を郡毎にあげると、秋田郡は大葛21・根下戸12・沢尻12・葛原10・十二所26・扇田29・湊14・秋田65、山本郡は能代

33、河辺郡は新屋11、仙北郡は刈和野11・神宮寺14・角館18・上桧木内11・生保内39・田沢42・長野17・六郷24、平鹿郡は横手13、雄勝郡は湯沢14となっている。これらを見ると秋田などの町部町人がかなり入っていることと村部においても豪農層が入っている<sup>6)</sup>。また町村で戦争に参加したものが入っている(後述)。つまり、大きくみて献金などの経済的功績と実戦参加の二類型があるように思われる。

第1表 秋田藩戊辰役軍功賞典録(庶民の部)

町 村	名	備 考
(秋田郡)		
雪 沢	川 田 小左エ門	賞 言
"	" 源 吾	"
"	" 貞 治	"
雪 沢 石 湊	巳 之 助	一人扶持
雪 沢 茂 内 屋 敷	吉 左 エ 門	"
雪 沢	勇 八	手人扶持 <sup>鳥</sup>
白 沢	惣 三 郎	賞 言
"	仁 三 郎	手人扶持 <sup>鳥</sup>
"	友 太 郎	"
茂 内	宮 内 平	賞 言
商 人 留	彦 太 郎	"
達 子	仲 谷 八郎右エ門	一人扶持
二 井 田	永 松	賞 言
"	利 右 エ 門	"
二 井 田 四 羽 出	惣 右 エ 門	"
二 井 田	中 沢 多治兵エ	一人扶持
"	第 之 助	"
"	惣 助	"
赤 石	幸 助	賞 言
"	佐 助	"
"	伊 兵 エ	一人扶持
笹 館	善 助	賞 言
"	善 之 助	一人扶持

秋田藩戊辰戦争における百姓の動向について

大 葛	渡 辺	弥七郎	賞 言
"	山 口	市太郎	"
"	阿 部	忠 吉	"
"	"	弥五郎	"
"	金 山	中	"
"	佐 藤	永 吉	"
"	細 野	与 市	"
"		三右エ門	"
"		久四郎	"
"		嘉左エ門	"
"		喜之助	"
"		権太郎	"
"		久太郎	"
"		吉 藏	"
"		正右エ門	"
"		政五郎	"
"		熊五郎	"
大葛森合		庄右エ門	"
"		吉五郎	"
大葛大谷		万之助	手二人扶持
大 葛		熊 吉	"
味噌内		伊 助	賞 言
"		市 藏	"
"		三太郎	"
"		吉郎右エ門	"
"		専太郎	"
"		伊左エ門	"
"		五郎八	"
独 鋳	小 松	太郎右エ門	"
"		清太郎	"
"		兵左エ門	"
"		喜左エ門	"
"		長四郎	"
"	小 松	多治右エ門	一人扶持
板 沢	富 樫	永 藏	賞 言
"		永四郎	"
"		作之丞	"
"		吉十郎	"
"		三四郎	"
"		吉太郎	"
"	富 樫	七右エ門	一人扶持
"		庫之助	"
岩 瀬		与五右エ門	賞 言
"		林兵衛	"

岩 瀬		幸 助	一人扶持
岩瀬越山		甚七(子供)	
外 川 原		〔一村家頭 35人〕	賞 言
"	花 田	五郎左エ門	一人扶持
花 岡	鳥 瀉	牛之助	"
軽井沢		儀左エ門	賞 言
曲 田		徳兵エ	"
山 館		半四郎	"
山館金谷		与 助	"
根下戸		〔郷 中〕	"
"		長 助	"
"		辰之助	"
"		平 藏	"
"		長九郎	"
"		甚四郎	"
"		甚兵エ	"
根下戸船場		〔郷 中〕	"
"		長左エ門	"
"		四郎兵エ	"
"		五兵エ(子供)	死二人扶持
"		有 助	賞 言
釈迦内		森之助	"
"		嘉右エ門	"
"		六之助	"
"		東一郎	"
"		子之吉	"
"		岩 松	"
"		仁 助	"
"		梅太郎	"
"		(親駒吉)	"
大 館	小 室	源 吉	"
"	小室	源吉(親喜左エ門)	"
"	安 完	才 治	"
"	工 藤	亀 作	"
"		軍 治	"
大館新町		仁右エ門	一人扶持
大 館		和 吉	"
"		久 吉	"
"		儀兵エ	"
片 山		〔郷 中〕	賞 言
"	斎 藤	治兵エ	"
"		勘右エ門	"
山 田		助太郎	"
葛 原	(船 守)	市右エ門	"

国 安 寛

葛 原		六之助	賞 言
"		和三郎	"
"	菅 原	専太郎	一人扶持
"		甚四郎	"
"	木次谷	源十郎	"
"		善治	"
"		喜助	"
"		六兵工	"
"		清八	"
沢 尻		与七	賞 言
"		善兵工	"
"		西松	"
"		藤吉	"
"		藤松	一人扶持
"		百太郎	"
"		三太郎	"
"		徳松	"
"		市之助	"
"		倉松	"
"		惣助	二人扶持
"		藤吉(祖父善九郎)	"
別 所	黒 田	長松	賞 言
"	佐 藤	米吉	"
猿 間	畠 山	平助	"
"		長助	"
"		辰之助	"
十 二 所		勘九郎	"
"		久蔵	"
"		清太郎	"
"		三四郎	"
"		市五郎	"
"		清四郎	"
"		久右工門	"
"		久右工門	"
"		和兵工	"
"		佐兵工	"
"		(所右工門三男)和吉	"
"		常松	"
"		亀吉	"
"		長右工門	"
"		喜右工門	"
"		万助	"
"		甚六	"
"		幸助	"

十 二 所	畠 山	勘右工門	賞 言
"		吉蔵	"
"		専太	"
"		仁助	"
"		内蔵吉	"
"		幸助	一人扶持
"		常吉	"
"		丈助	"
大 滝		惣三郎	賞 言
"		駒吉	"
"		六右工門	"
"		米松	一人扶持
扇 田	山 脇	俊太郎	賞 言
"		五郎助	"
"		九兵工	"
"		米吉	"
"		与蔵	"
"		文蔵	"
"		直吉	"
"		宇兵工	"
"		又兵工	"
"		伝四郎	"
"		文治	"
"		五三郎	"
"		助十郎	"
"		久右工門	"
"		三八郎	"
"		与兵工	"
"		三右工門	"
"		久太郎	"
"		鉄之助	"
"		金右工門	"
"		喜左工門	"
"		喜藤治	"
"	河 上	新太郎	"
"	麓	長治	"
"		又吉	"
"		熊之助(子供)	死 <sup>去</sup> 二人扶持
"		与市郎( )	"
"		新兵工( )	"
"		八右工門妻みよ( )	"
太 田 新 田	長 谷 川	彦 市	一人扶持
根 子		松五郎(子供亥之助)	討死、一人扶持 金五百匹
阿 仁 比 立 内		弥兵工	賞 言

秋田藩辰辰戦争における百姓の動向について

阿仁比立内	彦 助	賞 言
可笑内	長五郎	〃
幸屋渡	徳太郎	〃
戸島内	卯三郎	〃
阿仁中村	多 助	〃
阿仁打当	惣 吉	〃
道目木	三之丞	一人扶持
〃	多吉(子供)	死人扶持
五味堀	久 治	賞 言
〃	東 蔵	〃
〃	東蔵(子供寅吉)	〃
〃	定吉(子供)	死人扶持
小 又	佐藤 菊 治	賞 言
〃	森 川 徳五郎	〃
〃	佐藤 兵九郎	一人扶持
小沢田	伊藤 内蔵介	賞 言
〃	〃 時五郎	一人扶持
〃	伊藤時之助(子供蔵之助)	〃
小阿仁根田	金 森 東 齊	賞 言
堂 川	源 治	〃
桂 瀬	喜右工門	〃
前 田	丑五郎	〃
綴子村大畑	弥左工門	手人扶持
前 田	勘左工門(妻)	賞 言
湯 又	多兵工	手人扶持
〃	多兵工	〃
餌 刺	為 助	一人扶持
館 越	小七郎(子供)	死人扶持
馬 場 目	円 松	手人扶持
〃	与治右工門	〃
五十目	駒 七	〃
〃	金五郎(子供)	死人扶持
妹 川	伝 七	手人扶持
坂 本	金 八	〃
下 樋 口	専 蔵	〃
大 久 保	吉 助	死人扶持
金 山	甚兵工(子供)	〃
高 岡	平四郎(〃)	〃
脇 本	新吉(〃)	〃
北 浦	(修験)長応院後住	〃
湯 元	(〃)常楽院	〃
岩 城	多 郎 作	手人扶持
中 村	平之助(子供林蔵)	死人扶持
湊	(庄屋)神馬 成蔵	賞 言

湊	(見習)神馬 喜太郎	賞 言
〃	藤 林 走之蔵	〃
〃	山 村 与惣助	〃
〃	岩 見 八郎兵衛	〃
〃	佐々木 正 助	〃
〃	山 本 新四郎	〃
〃	佐々木 辰 助	〃
〃	河 内 謙 治	〃
〃	黒 丸 喜惣兵工	〃
〃	谷 野 五郎左工門	〃
〃	松 井 栄之助	〃
〃	金 沢 松右工門	一人扶持
〃	駒野屋 慶 助(子供)	死人扶持
秋 田	(御用聞)野上八郎右工門	賞 言
〃	板 垣 太 七	〃
〃	小 笹 定 吉	〃
〃	古 谷 太兵工	〃
〃	中 村 又右工門	〃
〃	〃 六郎兵工	〃
〃	湊 精 助	〃
〃	高 堂 第 助	〃
〃	桜 屋 喜 一 郎	〃
〃	渡 辺 市兵工	〃
〃	森 沢 平 八	〃
〃	牧 水 吉兵工	〃
〃	山 中 新十郎	〃
〃	上 村 新 蔵	〃
〃	山 崎 才兵工	〃
〃	杉 山 良 助	〃
〃	相 沢 喜太郎	〃
〃	武 田 利 七	〃
〃	佐々木 和 助	〃
〃	武 田 為 八	〃
〃	中 村 又兵工	〃
〃	銀 屋 政 治	〃
〃	〃 政 吉	〃
〃	川 越 貞 助	〃
〃	河 村 政 治	〃
〃	赤 尾 五左工門	〃
〃	〃 良之助	〃
〃	〃 鉄 吉	〃
〃	〃 伝 治	〃
〃	野 上 八郎右工門	〃
〃	船 木 五郎三郎	〃

国 安 寛

湊	二 木	六左工門	賞 言
”	中 村	作之助	”
”	那 波	三郎右工門	”
”	幸 野	治右工門	”
”	渡 部	文 助	”
”	藤 本	富 治	”
”	相 沢	清 兵 工	”
”	平 山	八左工門	”
”	吉 川	惣右工門	”
”	進 藤	嘉 兵 工	”
”	石 山	多郎兵工	”
”	山 岳	甚 助	”
”	小 仲	久 兵 工	”
”	高 桑	清 兵 工	”
”	相 沢	正 蔵	”
”	渡 部	善 八 郎	”
”	三 平	倉 松	”
”	佐 藤	武 助	”
”	木 村	清 兵 工	”
”	池 田	善 八	”
”	木 村	喜 助	”
”	佐 藤	岩 松	”
”	石 川	敬 吉	”
”	渡 部	喜 兵 工	”
”	野 上	吉郎右工門	”
”	小 川	善 三 郎	”
”	岡 田	五郎兵工	”
”	石 山	太 喜 蔵	”
”	安 免	貞 吉	”
”	”	礼 助	”
”	佐 藤	半 兵 工	”
”	二木六左工門(子供千代治)		”
”	那 波	三郎右工門	一人扶持
”	大井政五郎長屋(与三郎子供)		死 <sup>去</sup> 二人扶持
戸 島 内 ?		広 吉	賞 言
板 子 内 ?		拾 五 郎	”
”		弥五右工門	”
長 淀 田 ?	武 石	讓 之 助	”
小 滝 ?	新 林	金 五 郎	”
小 野 ?		源 之 助	”
土 川 ?		清 四 郎	”
”		熊 五 郎	手 <sup>扶</sup> 二人扶持
”	已 之 助	(子供七五郎)	”
富 岡		専右工門	”

(山本郡)				
能 代	今 立	兵 十 郎	賞 言	
”	川 村	佐左工門	”	
”	相 沢	正 助	”	
”	堺	良 助	”	
”	(医師)安 濃 作 良		”	
”	土 井	利右工門	”	
”	川 上	久 三 郎	”	
”	大 高	平 作	”	
”	相 沢	治 兵 工	”	
”	清 水	九 兵 工	”	
”	東 海 林	兵 治	”	
”	相 沢	藤 治	”	
”	(社人)齐 藤 富		”	
”	堺	時 治	”	
”		長 吉	”	
”		長 松	”	
”		長 四 郎	”	
”		亀 八	”	
”		与 八 郎	”	
”		常 蔵	”	
”		宇 吉	”	
”		松 太 郎	”	
”		孫 一 郎	”	
”		源 助	”	
”		権 之 助	”	
”		五郎兵工	”	
”		作 太 郎	”	
”		吉右工門	”	
”		久 治	”	
”		彦 兵 工	”	
”		清 蔵	”	
”		五郎右工門	”	
”		政 吉(兄東吉)	死 <sup>去</sup> 二人扶持	
向 能 代	峯 部	新 八 郎	一人扶持	
浅 内	原 田	五右工門	賞 言	
桧 山	野 呂	彦右工門	”	
”	山 崎	五郎左工門	”	
田 床 内	笠 井	惣右工門	”	
母 躰	小 杉 山	政 吉	”	
”	佐 々 木	久 米 助	”	
”	戸 松	忠 助	”	
石 川		松 蔵 (子供)	死 <sup>去</sup> 二人扶持	
比 井 野		与 吉 ( ” )	”	

秋田藩戊辰戦争における百姓の動向について

太内田	三治(子供)	死人扶持
大森	与七郎(〃)	〃
鯉川	多助(親源之助)	〃
浜田	清水与七郎	賞言
川尻	杉沢与七郎	〃
〃	児玉文四郎	〃
久米岡新田	佐々木多郎兵エ	〃
久米岡	児玉甚左工門	〃
富岡新田	第吉	手人扶持
森岡	湊三木右工門	賞言
〃	三浦駒吉	〃
〃	〃易蔵	〃
〃	湊伝助	一人扶持
〃	鈴木喜右工門	〃
〃	三之助(子供)	死人扶持
上岩川	工藤源治	賞言
〃	平左工門	〃
〃	易五郎	〃
下岩川	北林良太	一人扶持
〃	近藤理兵エ	〃
外岡	山田文蔵	賞言
〃	内藤助五郎	〃
〃	佐々木正之亟	〃
金光寺	池内七郎兵エ	〃
志戸橋	袴田礼之助	〃
〃	石井八郎右工門	一人扶持
〃		
(河辺郡)		
新屋	相沢八太郎	賞言
〃	仙葉庄左工門	〃
〃	宮腰常蔵	〃
〃	山家吉之助	〃
〃	徳左工門	〃
〃	源七	〃
〃	源八	〃
〃	文吉	〃
〃	万吉	〃
〃	仁兵エ	〃
〃	佐々木吉左工門(親吉左工門)	〃
牛島	高橋惣左工門	〃
〃	喜右工門(子供)	死人扶持
猿田	勘右工門	手人扶持
椿川	久蔵	賞言
石田	佐藤八兵エ	手人扶持

桂川	藤右工門	賞言
女米木	礼三郎	〃
戸嶋	鈴木三吉	〃
〃	清治	〃
〃	田部正吉	〃
〃	岡部正蔵	〃
柴野	鈴木長八	〃
式田宮崎	佐々木三助	紋付
船岡	豊嶋長兵エ	賞言
〃	菅原利右工門	〃
河原田	大山作右工門	〃
〃		
(仙北郡)		
境	鈴木権内	賞言
〃	進藤作太郎	〃
〃	奥田重右工門	〃
〃	〃六右工門	〃
小種	加藤政治	〃
〃	半七	〃
〃	加藤与惣左工門(子供)	死人扶持
峯吉川	作助	賞言
〃	正三郎	〃
〃	藤三郎	〃
〃	甚八	〃
〃	万蔵	〃
〃	長右工門	〃
〃	弥左工門	〃
荒川	丈吉	〃
強首	小山田藤右工門	〃
大沢郷寺村	佐平子供	死人扶持
刈和野	若松善左工門	賞言
〃	武藤長右工門	〃
〃	土井権右工門	〃
〃	若松善兵エ	〃
〃	武藤専太郎	〃
〃	奥田重太郎	〃
〃	永沢与七郎	〃
〃	土肥斧松	〃
〃	伊藤良兵エ	〃
〃	五郎作(子供)	〃
〃	奥田多助(子供)	〃
松倉	佐々木市左工門	賞言
小杉山	藤右工門	〃
〃	敬吉(子供)	死人扶持

國 安 寛

半道寺	嵯峨	八兵工	賞言
今泉		席? 蔵	"
"		宇七	"
"	小笠原	多右工門	"
北檜岡	鈴木	多郎兵工	"
"	"	卯右工門	"
"	高橋	勘兵工	"
"	富樫	伝八郎	"
"		亀松	"
神宮寺	伝野	治兵工	"
"	富樫	伝右工門	"
"	細谷	政之助	"
"	高橋	勘九郎	"
"	"	藤右工門	"
"	富樫	伝五郎	"
"	小西	富治	"
"	"	惣吉	"
"		佐五郎	"
"		新五郎	"
"		新五郎	"
"		新三郎	"
"	(医師) 佐々木	玄民	一人扶持
"		伝之助	手一人扶持
花館		清左工門	賞言
"		清六(子供)	死人扶持
新屋地		丈吉	賞言
大曲	加藤	清四郎	"
"	田口	富治	"
"	斉藤	与惣吉	"
"	竹内	五郎兵工	"
"		市左工門	"
"		五郎助	"
"		勘十郎	"
"	有坂政之助	(親市左工門)	"
鑓見内	田村佐治	右工門(子供)	死人扶持
戸地谷	後藤	啓一郎	賞言
"		三郎右工門	"
"	斉藤	祐太郎	"
"	"	左右吉	"
払田	後藤	新右工門	"
"	高橋永吉	(子供富吉)	死人扶持
小館	高橋	金蔵	賞言
"	藤井	政五郎	"
"		鉄蔵	"

勝楽	太田	源八	賞言
"	金	佐治兵工	"
"		清松	"
"	山本	正右工門	"
"	太田	吉右工門	"
"	本庄	宇左工門	"
"		吉左工門	"
岩瀬	内藤	宇七	"
角館	佐藤	政之丞	"
"	福山	第助	"
"	小林	作右工門	"
"	宮田	善吉	"
"		団五郎	"
角館中町	堺	清兵工	"
角館上新町	小林	治右工門	"
角館横町	(画工) 平福	文池	"
角館下新町	加賀	倉之助	"
角館中町	田口	儀兵工	"
"	佐藤	留五郎	"
角館	武村	忠兵工	"
"	佐藤	重左工門	"
"	小林	喜四郎	"
"	(画工) 平福	文池	"
"	富木	弥右工門	"
"	"	長左工門	"
角館新町		与四郎	手一人扶持
川川原		重蔵	賞言
"		富蔵	手一人扶持
"		重蔵	"
山谷川崎		養吉	賞言
上桧木内		孫兵工	"
"		佐市	"
"		宗右工門	"
"		与市	"
"	鈴木	八右工門	"
"		源太郎	"
"		鉄五郎	"
"		房松	"
"		定之助	"
"		永吉	"
"	鈴木	松之助	"
下桧木内	浅利	勘右工門	"
西明寺	左曾田	政右工門	"
"	江橋	九郎右工門	"

秋田藩戊辰戦争における百姓の動向について

田 中	長之助(子供)	死人扶持
"	長之助(子供)	"
生保内	倉橋 六太郎	賞言
"	" 和吉	"
"	佐川 今平	"
"	佐々木 清右エ門	"
"	樋口 清作	"
"	藤井 又吉	"
"	高橋 庄助	"
"	" 寅之助	"
"	" 金藏	"
"	" 庄右エ門	"
"	照嶋 長七	"
"	三浦 久助	"
"	佐々木 金三郎	"
"	宮本 多七	"
"	難波 七郎兵エ	"
"	柴田 松藏	"
"	田口 七郎右エ門	"
"	" 久松	"
"	" 七五郎	"
"	" 第助	"
"	" 勘四郎	"
"	戸坂 三弥	"
"	鈴木 六郎右エ門	"
"	渡部 権右エ門	"
"	高階 茂左エ門	"
"	畠山 佐治右エ門	"
"	" 円右エ門	"
"	" 孫六	"
"	" 伊右エ門	"
"	" 金右エ門	"
"	" 忠助	"
"	" 仁右エ門	"
"	" 武左エ門	"
"	" 間兵エ	"
"	" 三右エ門	"
"	" 石五郎	"
"	庄兵エ(子供)	死人扶持
"	庄兵エ(子供)	"
"	十郎兵エ(子供)	"
田 沢	千葉 清九郎	賞言
"	" 重藏	"
"	" 与吉	"

田 沢	千葉 与吉	賞言
"	堀川 豊三郎	"
"	" 儀三郎	"
"	" 清兵エ	"
"	伊藤 久治	"
"	浦山 久藏	"
"	" 久吉	"
"	" 久吉	"
"	八柏 忠一郎	"
"	" 忠市郎	"
"	伊藤 七右エ門	"
"	" 久右エ門	"
"	" 久右エ門	"
"	" 与吉郎	"
"	" 七太郎	"
"	" 与八郎	"
"	" 吉三郎	"
"	" 多郎兵エ	"
"	" 教治	"
"	" 太郎吉	"
"	" 太郎吉	"
"	" 孫右エ門	"
"	" 三郎兵エ	"
"	" 喜藏	"
"	" 長太郎	"
"	" 市右エ門	"
"	" 太兵エ	"
"	" 文治	"
"	" 藤七	"
"	" 市左エ門	"
"	" 半十郎	"
"	" 作兵エ	"
"	" 多左エ門	"
"	" 与八郎	"
"	" 長太郎	"
"	" 庄左エ門	"
"	" 惣八郎	"
"	佐五平子供(親佐五平)	"
"	堀川 該十郎	一人扶持
卒 田	" 久治	賞言
"	" 吉五郎	"
横 沢	" 三郎右エ門	一人扶持
"	" 三郎右エ門	"
横 堀	川原 浅吉	賞言



国 安 寛

白岩前郷	下田	忠右工門	賞言
"	高村	茂助	"
"	渡部	勇之助	"
"	"	勘左工門	"
"	"	宇七	"
"	"	伊兵工	"
"	"	千代松	"
"	"	角兵工	手人扶持
"	"	竹藏	"
角館東前郷	藤川	内藏助	賞言
上花園		甚藏	手人扶持
下花園	菅	七郎兵工	賞言
小神成	鈴木	常治	"
太田	真木	為右工門	"
"		小左工門	"
"		(子供庫之助)	"
"		(孫桂之助)	"
"	鈴木	佐左工門	"
小沼		喜右工門	"
栗沢		吉右工門	"
"		喜右工門	"
国見	小林末吉	(父)	死一人扶持
下鷲野	茂木清松	(父)	"
米沢新田	小松	市藏	賞言
"	黒沢	佐太郎	"
駒場		倉吉	"
長野	秋山	半左工門	"
"	"	多郎八	"
"	三浦	福松	"
"	山田	与四郎	"
"	"	鉄之助	"
"	平瀬	多右工門	"
"	鈴木	喜助	"
"		庄五郎	"
"		惣右工門	"
"		多吉	"
"		甚兵工	"
"		権十郎	"
"		荒藏	"
"		熊吉	"
"		彦右工門	"
"		金松	"
"	高橋友治	(父)	死一人扶持
潟		金五郎	手人扶持

下延	高橋	惣助	賞言
"	鈴木	三郎右工門	"
野田		東一郎	"
"	草薨	謙吉	"
葛川	北田	長之助	"
柏木田新田	佐藤	久四郎	"
"	"	東兵工	"
西長野	畠山	丹十郎	"
千屋		文藏	"
"	煙山	石五郎	"
元本堂		末吉	"
"		勘四郎	"
"		吉右工門	"
土崎	熊谷	弥四郎	"
六郷	小西	菊治	"
"	小西	菊治	"
"	"	清藏	"
"	"	作五郎	"
"	"	豊治	"
"	地主	常三郎	"
"	大山	庄兵工	"
六郷高野	栗林	武藏	"
六郷	小杉	豊治	"
"	久米	理左工門	"
"	"	鶴松	"
"	"	直吉	"
"	照井	道拙	"
"	高山	友吉	"
"	寺田	保藏	"
"	辻	辰之助	"
"	"	長之助	"
"	丹	兵助	"
"	梅原	誠治	"
"	小沢	清藏	"
"	竹村	良八郎	"
"	佐藤	長治	"
高野	伊藤	万藏(母)	死一人扶持
本道町		松五郎(家内与之助)	手人扶持
藤木		喜八郎(子供)	死一人扶持
金沢前郷	加藤	仁左工門( )	"
金沢東根	源沢	円兵工(子供久藏)	"
金沢中野	渡辺	兵右工門	賞言
"	伊藤	清兵工	"
"	伊藤	清兵工	"

秋田藩戊辰戦争における百姓の動向について

金沢中野	伊藤兵吉	賞言
金沢本町	治右エ門	〃
〃	山田治右エ門	〃
金沢新田	定七	〃
下岩川?	長松徳十郎	〃
〃	米松吉五郎	〃
〃	小松伝右エ門	〃
黒川?	高橋佐藤右エ門	〃
〃	〃豊治	〃
〃	二階堂鶴松	〃
上野田?	小西多兵エ	〃
石上	勇吉	〃
(平鹿郡)		
角間川	伊兵エ	賞言
〃	慶右エ門	〃
〃	最上伝右エ門	〃
〃	〃久右エ門	一人扶持
〃	鎌田甚七	〃
〃	荒川茂吉	〃
〃	勘三郎(子供)	死人扶持
袴形	忠吉(〃)	〃
横手	中西八五郎	賞言
〃	斎藤忠助	〃
〃	(医師)清水龍民	〃
〃	須釜兵太	〃
〃	吉右エ門	〃
〃	最上忠右エ門	〃
〃	七尾多吉	〃
〃	泉川新太郎	〃
〃	小坂与三郎	〃
〃	加賀屋善吉	一人扶持
〃	柏谷忠兵エ	賞言
〃	藤沢嘉兵エ	〃
横手前郷	嶋森六左エ門	〃
赤坂	三五郎	〃
上境	作三郎	〃
山内	長兵エ	〃
〃	勘兵エ	〃
〃	三蔵	〃
〃	黒沢惣兵エ	〃
小松川	高橋十郎右エ門	〃
黒沢	長右エ門	〃
今宿	万蔵	〃

深井	与五兵エ	死人扶持
〃	与五郎	〃
浅舞	慶蔵	賞言
〃	小松田和兵エ	〃
〃	遠藤万右エ門	〃
〃	須田新之助	〃
〃	中村幸右エ門	〃
〃	渡辺岩右エ門	〃
〃	佐々木市兵エ	一人扶持
下鍋倉	重右エ門	賞言
〃	甚兵エ	〃
〃	幸八	〃
〃	正右エ門(子供)	死人扶持
蛭野	政十郎	一人扶持
深間内	巳之松	賞言
靨醐	伊藤伝之助	〃
〃	藤原多左エ門	〃
上鍋倉	伝之助(子供)	死人扶持
〃	三太郎(〃)	〃
木下	弥左エ門	賞言
今泉	養吉	〃
増田	安部八右エ門	〃
〃	久右エ門	〃
(雄勝郡)		
湯沢	岩崎貞右エ門	賞言
〃	(社家)高橋東馬	〃
〃	長尾新右エ門	〃
〃	三河屋新助	〃
〃	塩田利吉	〃
〃	石川久吉	〃
〃	帯屋市三郎	〃
〃	高山戸平	〃
〃	喜助	〃
〃	善八	〃
〃	順平	〃
〃	羽右エ門	〃
湯沢田町	吉五郎	〃
湯沢	善八	〃
岩崎	石川又左エ門	〃
〃	〃平兵エ	〃
〃	菅元弘	〃
山田	〃順助	〃
〃	高橋三左エ門	〃

国 安 寛

山 田	高 橋 勇 助	賞 言
"	中 嶋 多治兵エ	"
金 屋	久 蔵	死一人扶持
西馬音内前郷	佐 藤 太 三 郎	賞 言
"	飯 塚 彦 太 郎	"
"	阿 部 九右エ門	"
"	" 吉 治	"
"	" 忠右エ門	"
堀 廻	小 野 養 蔵	"
高 尾 田	亀 治	死一人扶持
下 仙 道	藤 原 宇之吉	賞 言
田 代	長 谷 山 庄 助	"
"	源 吾	"
"	柴 田 養之助	"
大 沢	忠 吉	"
"	佐 太 郎	"
"	佐 藤 長之助	永 帶 刀
赤 袴	藤 野 長 太 郎	賞 言
貝 沢	佐 藤 安 兵 エ	"
"	"	"
三 梨	惣助(親曾兵エ)	死一人扶持
稲 庭	阿 部 新 三 郎	賞 言
小 安	良 吉	"
下 関	多 助	手一人扶持
横 堀	金 沢 幸之助	賞 言
"	長 倉 仁右エ門	"
"	小 山 田 熊 吉	"
"	鈴 木 正 五 郎	"
"	小 山 田 孝 作	永 帶 刀
"	西 村 半 十 郎	"
中 村	高 橋 多郎兵エ	賞 言
"	菊 地 半 兵 エ	"
下 院 内	羽 津 半 助	"
"	" 易 蔵	"
"	斎 藤 徳 太 郎	"
"	金 沢 儀 助	"
"	金 之 助	"
"	伊 之 助	"
"	岩 五 郎	"
"	宮 松	"

さて、この『賞典録』に記載されている人びとは、どのような身分・階層であるか。また組織の方法や活動状況は殆んどわからない。これらは地元の資料を丹念に発掘することによって可能になると思う。いま一部分であるが判明した分を紹介しよう。

『大館戊辰戦史』によると、「大館より農兵として出陣の者」として足軽町工藤十蔵・新町高橋新吉・赤館町太田部利助・新町稲庭宇吉の4名が天神林庄蔵・兼水境に属して農兵を募集し指揮したとあるが、『賞典録』には見当たらない。また『同史』の『賞典録』の部の「平民生涯」に20名をあげているが、『賞典録』で確認できるのは、片山・雪沢・白沢・外川原・岩瀬・根下戸・十二所の各村の10名のみである。また秋田郡扇田村については、『賞典録』に「八右エ門妻みよ 子供 死去一人扶持」の項にあり、少くとも秋田藩庶民の中でただ一人の女性受賞者である。山城みよは夫と死別のあと戊辰戦争に際し肝煎川上新太郎の指導のもとに小荷駄方として従軍したが銃弾に倒れた。明治2年に靖国神社にまつられたという。太平洋戦争になると「戊辰の烈婦 山城みよ女」原作明石貞吉氏・作画清水柴峰・製作秋田画劇顕彰会になる紙芝居が製作されて、昭和18年から県内および東北を回ったといわれる。これはかなり特殊な例であるが、今後の検討資料となる。この外扇田村では賞の内容が異なる例もあるが、『賞典録』に記載されているものの中で前述の川(河)上新太郎など10名と、達子・笹館・独鋤の3名を地元で確認している<sup>8)</sup>。

また、『賞典録』に記載されずに受賞している場合もあるが<sup>9)</sup>、その一例をあげよう。雄勝郡西馬音内堀廻村親郷肝煎土田伊助に3通の賞状があるが、<sup>10)</sup>一つは6月付けのもので、去辰年秋の軍事の際に大沢村田代村に宿陣中人馬の継立・賄の手配をした。矢嶋陣屋の材料を集めた。とくに8月中賊徒乱入し5升備米を借りたいと申し入れたが寄郷共に手をつけさせなかった。さらに数回にわたる御用米金を献上した。よって生涯2人扶持を与えている。また

雄勝郡西馬音内堀廻村

土田伊助

此度御時節を奉存御軍事今江金百五拾両献納致候段深切奇特之至候ニ付依之為御賞永苗字被成御免候

九月

雄勝郡西馬音内堀廻村

土田伊助

軍功御再調ニ付最前之御賞は取消更ニ御取調を以御賞

秋田藩戊辰戦争における百姓の動向について

言被成置候

辛未七月

これによると、賞が明治4年に格下げされたと思われるが、「賞言」を受賞している。

3. 賞典録と農兵

『賞典録』によると<sup>11)</sup>、多賀谷長右エ門組下能代給人の中田文平は「去秋中農兵式百人」を指揮して出兵し、8月12日秋田郡十二所を奪回した際に中山村に渡り、軽井沢まで進出して「組子之農兵が賊の船2艘分捕る。同月20日には農兵が賊の幕を分捕り、さらに9月2日には同郡早口村より進撃し川原に屯集している賊を追崩した。この功績により賞として銀7枚下すとの申渡しが明治2年にあったが、明治4年には「軍功再調ニ付最前之御沙汰取消」（朱書記載）がある。このような家臣団による農兵指揮は、雄勝郡院内村の大山若狭組下であった平岡慶治・前田敬之進の場合も同様である。この両名は『賞典録』（三巻）にそれぞれ金2,000匹・1,300匹の受賞が記載されている。その人数については「私共江附属之農兵共九月十八日夕十月十三日迄滞陣人数引払之儀小貫又三郎 御差図ニ付引払始致候十八日夕十九日迄加入人数百三十拾余人御座候<sup>12)</sup>」とある。また『賞典録』記載の農兵同志は、雄勝郡院内村羽津易蔵・山田村高橋三右エ門・（高橋正右エ門子供）勇助・同村中嶋多治兵エが確認できる<sup>13)</sup>。

また、『賞典録』記載の沢尻村藤吉（二人扶持）の場合は、「明治二年十二月軍功御取調之節御達書」として祖父善九郎は賊を妨害したため逮捕されたが逃亡し、惣助（賞典録に二人扶持）と探索を命じられ報告・賊の本陣小荷駄宿へ放火・進軍の道案内等の活躍をしたが、当夏に病死した。さらに親三郎治は茂木筑後に属し出兵、これまた病死した。その賞として永苗字・生涯2人扶持を下す、とある。また「明治四年辛未七月軍功御（取調之）節御渡御書付左之通」

秋田郡 沢尻村 藤吉

戊辰戦争之砌、親三郎治出兵属奮戦、且ツ深く探索ニ尽力、別而立農兵取立、殊ニ賊陣沢尻村ニ忍入探索ヲ極メ大河ヲ涉り扇田本陣へ報告之始末頗ル神妙之至ニ候。依之為没後御賞、其方生涯一人御扶持下賜候事。<sup>14)</sup>  
辛未七月

この文中に見える「農兵取立」と関連すると思われるが、7月10日に茂木筑後が沢尻村民約30名に長柄槍一筋ずつ賜わり農兵を仰せつける。同月13日には茂木筑後が沢尻農兵に鉄砲30丁を賜わる<sup>14)</sup>とあるが、前述の能代の中田・院内の平岡・前田と同様に武士が関与する農兵である。

つぎに雄勝郡横堀村長倉仁右エ門（『賞典録』賞言）の場合は、

横堀村 仁左エ門

御大事之御場合と奉存同志申合賊討留候節働之次第奇特之至ニ付為御褒美金五兩被下置候  
十月

雄勝郡横堀村 長倉仁左エ門

戊辰年戦争之砌農兵相企尽力致候段奇特之至ニ付御賞言被成置候

辛未七月

とあり、農兵を組織しているが、その人数・範囲および他隊との関連は不明である。

また、山本郡森岡村付近では「九月二日、人数組立、誼兵隊と号<sup>16)</sup>」する農兵隊が組織されている。この組織の中心人物について『山本町史』では何人かをあげ結論をだしていない。この殆んどが『賞典録』に記載されている人物である。すなわち、山本郡下岩川村北林良太（1人扶持）・近藤理兵エ（〃）・志戸橋村石井八郎右エ門（〃）・森岡村湊彦？（信）助（〃）・湊三木右エ門（賞言）とあり、賞の内容は年代の相違もあり地元資料と異なる。人数については、明治元年9月10日ごろ111人<sup>17)</sup>

第2表 秋田藩賞典録郡別集計

郡	賞の内容	賞言	一人扶持	手負一人扶持	死亡一人扶持	二人扶持	紋付上下	永帯刀	計
秋田（秋田町含）		245	46	25	13	2			331
山本（能代町〃）		55	6	1	7				69
河辺		23		2	1		1		27
仙北（角館町含）		274	2	11	20				307
平鹿（横手町〃）		40	6		6				52
雄勝（湯沢町〃）		52		3	1			3	59
計		689	60	42	48	2	1	3	845

戦後明治2年10月ごろは180余人、となっている。任務は小荷駄・番兵・探索などで、官軍と行動を共にし花輪まで出兵している。

つぎに鎌田氏が取り上げた<sup>1)</sup>「有志隊」と『賞典録』の関係その他をみよう。まず旧小杉家所蔵の「農民有志隊連判帳」には19名が入っているが、この中『賞典録』に記載されているのは16名であると判断される。この中には『賞典録』の仙北郡黒川村は黒沢村とすれば2名が符合するし、また同郡払田村の後藤新右エ門子供伝兵エは親が『賞典録』に記載されているし、なお雄勝郡山田村高橋正右エ門は前述のように子供勇助が記載されている。結局、仙北郡元本堂村高橋小三郎・同郡板見内村出雲喜一郎の2名が『賞典録』に記載されていないだけである。また、「辻辰之助事蹟書」にある9月8日(?)角館会議所において血判誓約の19名の中16名が「連判帳」および『賞典録』の記載する人物と同じである。記載のないのは前述の高橋小三郎および同郡六郷村の辻富治・丹三保松の3名である。したがって「有志隊」の大部分が功績を認められて受賞したことになる。この「有志隊」については、とくに地元資料の発掘が進んでいないので今後の課題となるが、一つだけ指摘しておきたいことがある。それは組織に関することであるが、「辻辰之助事蹟書」によると、実弟の丹兵助および「9月6日朝七瀧山に会合せるは一族及同志中の重立ちたるものとして従弟照井道抽甥小杉豊治小西清蔵(兄弟)有志者竹村良八久米鶴松等十余名」とあり、一族が組織の一つの中核になっていることに注目したい。

つぎにあげるのは農兵隊という組織をもった確証はないが、類似したものとしてあげたい。これはとくに「大砲奪取一件」として地元では調査され伝えられたものである。<sup>18)</sup>この首謀者は平鹿郡下鍋倉村重右エ門とされ、彦四郎・幸八・慶治(重右エ門長男)・熊治(同2男)・藤治(同若者?)・仁三郎・惣次郎・重太郎(重右エ門分家)・善松・栄松・仁助が明治元年9月8日に重右エ門宅で相談し、途中立寄った同郡上鍋倉村伝之助(妻が重右エ門の妻の妹)が参加する。この中で『賞典録』に記載されているのは、下鍋倉村の重右エ門・幸八(賞言)と上鍋倉村伝之助子供(死去一人扶持)のみである。この組織については13名中5名が家のつながりをもつものであり、前述の有志隊と同じ側面をもっている。また、明治初年の「纏高帳」によると、慶治(当高6斗3合)・惣次郎(〃6升9合)・仁助(〃1斗2升4合)が村内で同組であると考えられ、近隣者といえよう。また、所持当高は判明する限りでは少ない。しかし慶治につい

ては、明治15年「田畑自作反別表」によると、<sup>19)</sup>2町以上の直作となっているので、この場合は所持面積は多い方に属す。これは明治初年以降に集積したものであろうかは不明である。この重右エ門達の動きの概略は、前述の幸八および平鹿郡植田村甚兵エと8月24日に出発し、仙北郡追分村で幸八と別れ探索、8月29日仙北郡大曲村に放火などを行っている。そして、9月9日に平鹿郡十文字村佐藤金兵エ宅にあった仙台藩の大砲1門を前述の13名で奪取し、伝之助宅の堆肥塚に隠した。ところが密告により伝之助が逮捕され、香具師喜惣治によって拷問の末一時釈放されたが、9月19日平鹿郡仁井田村で殺害される。その後、10月19日に伝之助の子供忠助・女房が喜惣治を仇討ちする。現存する資料の中に、

白米 三俵  
金子 四千疋  
秋田領 下鍋倉

伝之助

右者仙台庄内之賊党当領内江侵入暴戻乱妨之中ニ於而賤者之身ながら官軍江忠節を尽候処終ニ賊之為に殺害ニ逢候段不憫之至其忠情感入候依之右之通拝領被仰付代々忠介と名乗候様申付候事

慶応四年戊辰四?月廿四日

奥羽鎮撫総督府参謀<sup>20)</sup>

との賞状がある。この大砲奪取一件に関しては、平鹿郡今宿村小沢秀興がつぎのように記録している。

(9月16日)

一、先日十文字ニ而大砲式丁仙台衆より引取候者鍋倉重右エ門仁吉杯十五人位候由頭勤相知れ仙台衆右人数取押可候処下鍋倉之者六人下鍋倉之者いづれも逃去り候由依而親類之者尋下鍋倉伝二郎杯升田江被引付候よし是も大はんニ有之候<sup>21)</sup>

内容に少々誤報もあるが、この事件は近隣村に伝えられていることがわかる。また、この大砲奪取後の9月9日に重右エ門宅で13名が酒盛りを行うが、その際に重右エ門・幸八・甚兵エの3名が相談をして口止め料の金がほしいということになった。そこで幸八が沼館村塩田団平から借用を願ひに行った。団平は10両の願ひに対し5両を与えたので1人に1歩ずつの太儀料として与えた。<sup>18)</sup>団平家でも

一、下鍋倉小八御忠進之者同役も多ク有之様相見得候ニ付賊地ニ而手柄等有之候節入用無之笑?存金五両小遣等呉遣候処十文字ニ而仙賊之大砲砲丁組合手ニ而うはへ取(後略)<sup>22)</sup>

の書上げがあり、事実が実証できる。この類似農兵隊

## 秋田藩戊辰戦争における百姓の動向について

と地方市場町商人との結びつきが問題となる。

さて、ここで農兵隊同志の関連をみよう。それぞれのグループについては鎌田氏も取り上げているが<sup>1)</sup>、前掲「事蹟書」は「……兼て辰之助の直接相知の同志者にして賊を襲撃して之を悩ましたる者は院内平岡敬治手十余人湯沢松井長尾の組十四人山田高橋正右エ門手十余人金沢高橋幸奄手十二人角間川鎌田甚七手十余人花館斉藤勘左エ門二十七人なりしが更に又是等の誘導等に依りて互に相関連し結合せる有志輩……」とあって、他グループとの連けいを思わせるが、以下確認してみよう。前文に「湯沢・長尾の組」とあり、また鎌田氏が小杉文書より引用している中で、8月11日に「実父より被申付、横手町及増田村ヨリ湯沢町まで賊徒ノ景況探索ニ罷越シ、且ツ湯沢町長雄新右エ門ト申合<sup>1)</sup>」とあるが、小杉豊治と長尾との連けいがある。この長尾新右エ門は『賞典録』では「賞言」となっている。同家に

長尾新右エ門

秋中賊徒乱入之砌後藤伊八江申合御兵具蔵錠前を相預り諸御道具守護致候仕末柄行届候より御蔵入之諸品紛乱無之畢竟其方深切之勤拔群之事に候依之年始より元々元日 御盃頂載被仰付もの也

辰十二月

雄勝郡湯沢町肝煎

長尾新右エ門

戊辰ノ年戦争之砌数千人之官軍人馬之継立宿割等ニ至ル迄差支無之且ツ探索等に勉励致候段奇特之至ニ付御賞言被成置候

<sup>23)</sup>  
辛未七月

この外に辛未（明治4年）7月の賞状として、以上の功績と、雄勝郡役内村窮民助成として米15石5斗の提供により御紋付上下を受けている。

また、雄勝郡山田村高橋正右エ門は、辻辰之助等の「有志隊連判帳」にあるが、また前述のように院内の平岡・前田隊の中に子供勇助がでてくる。大砲奪取一件の首謀者平鹿郡下鍋倉村高橋重右エ門は、前述の仙北郡花館斉藤勘左エ門に宿泊または出入している<sup>18)</sup>。また「辻辰之助事蹟書」によると、辰之助と勘左エ門は親類であり、また同志であったとしている。さらに大砲奪取一件の仇討ちには 参謀名代として有志隊熊谷竹五郎が立会っている。

戊辰戦争終了後の農兵隊はどのような結果になったであろうか、若干ふれることにする。山本郡森岡村付近の農兵誼兵隊は明治2年ころには180余人参加していたこ

とは前にふれたが、同年10月に知藩事義堯の代理義脩の巡視があった際に森岡野原柳で同隊の訓練を視察し、酒をふるまっている<sup>24)</sup>。これは農兵の動向調査と懐柔策と考えられる。また『賞典録』二巻には

渡部住居

渡部左仲

右者去秋中御切迫之砌召連四ツ小屋村江 出兵致候農兵共江此度新組軽卒ト名目被付下候故此旨可被申渡候向後調陣又々追々御用等仰付候節者新組軽卒に而被罷出平生者百姓類是迄ニ違ハ無之候故心得違等無之様兼而能々可被申合候（後略）

これは明治2年であるが、一つは新組軽卒と改名すること、二つには百姓であることを心得よと戒めている点が重要である。明治新政府の身分意識の一端が表現されている。また、前述の農兵隊指導者斉藤勘左エ門は、戦後の処置の不公平に憤慨して発狂し、上り屋に入れられた上、毒殺されたといわれる<sup>25)</sup>。さらに辻辰之助も発狂の上死去する<sup>25)</sup>。農兵隊にとって新しい世になっても農民身分に甘んじて生きるしか方法はなかったものではなからうか。上昇転化しようとすれば阻止され、もともにも帰れず、生きる道を失ったように思える。

この戊辰戦争に対して庶民の立場から武士の動きを冷静にみていた人もいた。平鹿郡今宿村小沢秀興は、明治元年8月6日の日記に<sup>21)</sup>、「此軍ニ付諸人苦しミ大方ならず武士たる者ハ逃去り百姓町人をおとす事山々食物えらみいたし甚不得其意事ニ候」として、武士に対する不信を記している。さらに8月13日には、秋田が半国押落されその上に仙台勢など押取をし、米金銀及び着物の類を勝手にとっているとし、「…民之道具ハ何ニても断なし取行事言語同断の事ニ候国を取る事ハ武士之本意ならんに百姓之物をかすめ取し事ハ誠ニかなしき事ニ候」（傍点筆者）は武士に対する痛烈な批判である。また、紙芝居であるから事実是不明であるが、秋田郡扇田に南部軍が進撃した際に扇田村の学者中山文厚がつぎのように叫んだといわれる。「皆さん！ 皆さんがこの村を逃げる前に自分の申す事を聞いて貰いたい。（中略）この度の戦争は武士と武士との戦いだ。全く武士同志の意見の相違なのだ。我々町人や百姓には関係の無い戦争なんです。（中略）南部藩であろうか秋田藩であろうか、それは武士達の区分で、殿様からの禄を喰んで生きているから各々の主人に忠義を尽さねばならぬ人達の戦争なのです。百姓や町人にはその区別は断じてありません。逃げる必要はないのです。南部兵と言ってもこの村へ入れれば兵糧食を命ずるだけだんです。兵糧を出しさえすれば決して

危害を加えるものではない苦です<sup>7)</sup>。最後の文は小沢日記の事実と違うが、小沢の「国を取る事ハ武士之本意ならん」と、中田の「この度の戦争は武士と武士の戦いだ」といった点は、庶民の立場から武士の在り方を考えている点では基本的には同じと思われる。これは単に身分制的発想ではなく、底辺に生きる庶民には「国境」や「戦争」は無縁という観念をもっていたから前述の言がでてくるものと考えられる。

#### 4. 戦後の百姓の動向

戦後の農民の態度については、鎌田氏が雄勝・平鹿2郡の郡奉行であった川井小六の「演説覚<sup>26)</sup>」から引用しているように、奥羽の人心も戦争以前と異り、気立ても荒くなり、窮民も多くなり一揆徒党の類が生じかねない状況であった。こうした情勢を判断した川井は、平鹿郡親郷肝煎を1人ずつ呼び作況を聞き、また長州藩士中屋栄吉郎の意見も聞き、収納を半分とする意見をのべたといわれる。ここで、この資料の残存の仕方に問題があるので若干みると、現在のところ雄勝・平鹿2郡に「写」として残存している。「飛耳記」の筆者は雄勝郡岩崎村といわれる。また、平鹿郡樽見内村柴田善治は「慶応四年戊辰九月改明治元年成然るに同年春々奥羽之間ニ合戦起り同年八月月中仙庄之賊当地へ進入御百姓物入洪太ニ付此節雄平両郡之御支配川井小六様御百姓御救のため書上写左之通<sup>27)</sup>」という前文をつけて、明治3年3月に写し取っている。正しく、御百姓御救の書上であったから写し伝えられていると考えられる。この「書上＝演説覚」は二つに分けられるが、前段の要旨は前述したとおりで、10月17日に同役志賀為吉・小野崎要に被露している。しかしこの意見は取り上げられなかった。そうした中で、同年10月（日付け不明）雄勝・平鹿2郡の親郷肝煎の「口上書<sup>27)</sup>」が出された。「郡奉行川井小六様江雄平両郡親郷肝煎共差上候願書之写 樽見内村 慶応四年戊辰十月」とある。その要点は樽見内村の「写」にしたがってのべると、軍事の負担と破壊・不作により(1)小役銀・収納米半分(2)収納銀は金だけでなく金・銀や金・銀札・通用預り時相場で上納(3)給人の不法課税が多いので給地を蔵入地にするなどであった。さらに11月には平鹿郡より給人の調達・無尽・回在逗留の停止の願書が出される<sup>27)</sup>。同月には雄勝郡三梨村与惣右エ門が「先達而三親郷肝煎殿出府仕候而御御方へ歎願奉申上候得共只今願済之被仰渡も無之万願之通為叶不被置候へハ忽亡村ニ相成候外無之<sup>27)</sup>」として訴願している。その要点は雄平親郷肝煎の提出したものとやや同じであるが、異なる点をあげると、収納銀は銀1匁110文替で銀札・金札・通用預・光り銀

正金など時相場で上納、5斗米は御免、郷借金は今年禁止し3日目より10年間無利息で返済としている。この親郷肝煎・与惣右エ門の訴願を受けた郡奉行川井小六は12月2日には、後段「演説覚」を提出する。取り上げたのは給地を蔵入地にすることのみであった。そして藩と百姓の板ばさみになり「孰ニ茂御百姓共承服致様申論兼候ハ私之不行届之至り重畳恐入奉存候<sup>27)</sup>」として辞職を願いでた。前述今宿村の小沢は11月5日に「何にいたし秋田の御政事不宜候而百姓一統口説かぬ者無之候事ニ候小役銀四そうばい之所金は七貫文金に而取立候条然者当時金両替拾四貫文相場ニ有之候右小役銀八そうばいニ罷成候殊ニ伝馬歩夫の代ハ一円御手当て無之郷中諸かり大へんなる事に候百姓惣つぶれ<sup>21)</sup>候<sup>21)</sup>」と村の苦渋を表現している。

12月に入ると平鹿郡沼館村小百姓87名が肝煎・長百姓に対し「1. 御給分高御蔵入高ニ被成下度事 1. 小役銀六四五三四増倍之元銀壺匁百拾壹文替通用之内ヲ以上納事 1. 御収納米半取立之事 1. 三田米百苜付表宛無利足ニ而五ヶ年中借受申度事」の要望事項をだし、藩で取り上げないで年貢を嚴重に取り立てようとしているため、「私共無残出府仕候而御扱様へ直々願奉申上候外無御座候<sup>30)</sup>」とのべている。今までにない要望事項は三田米借用の件である。また、同月に隣村下河原村の小百姓30名<sup>31)</sup>が同じように肝煎・長百姓に訴願している。その要望事項はほぼ同じであるが、年貢半減の項に「当村之儀者水押場所故御毛引茂奉願上候<sup>32)</sup>」と追加がある。こうして百姓は実際に動きだすようになる。12月21日現在羽後町山間地域の6か村の百姓が500人ほど西音内堀廻村に下り、藩の役人および親郷肝煎と交渉したが、目的は沼館・下河原村と同じように久保田に直訴することであり、要望は小役銀御免・物成8歩引であった。しかし、この一揆勢はここで解散している。このことを平鹿郡今宿村では「当正月（明治2年）始り上浦山内衆々大勢ニ而庭むしろへ村々之名前印し稲之青立之處上上ニ致西馬音内に参り候由相聞<sup>34)</sup>」と報じている。また、雄勝郡郡山村では明治2年元日の日記に「昨日東西山内より百姓一揆起り当村之者之内四屋下郡衆出府に出足十五六人に及候処源五郎知り則言止め由<sup>35)</sup>」としている。ここで若干の整理として、戊辰戦争の戦後処理をだれが推進してゆかにかしぼって考える。時期的にみて第一に動いたのは、藩の役人の中で百姓に接触し事情に詳しい、しかも直接の責任者である郡奉行であった。しかし、藩と百姓の大きな溝の中にどうすることもできずに消えてゆく。第二に登場するのは、百姓身分の最高位である親

## 秋田藩戊辰戦争における百姓の動向について

郷肝煎であった。しかし、彼等は百姓の立場を貫きとおすことができなかつた。それは中間者<sup>36)</sup>という弱い立場によるものと考えられる。最後に表面にでるのは戦争の大きな被害者自身の百姓であった。結局、自身が受けた傷を自分でいやす方法しか残されていなかった。それほど藩体制秩序が崩壊し、明治新政府が力になりえなかつた変動の時期であった。百姓は最初に郡奉行を動かし、ついで親郷肝煎を動かししたが、両者とも救済力にはならなかつた。そして「訴願＝口上書」という幕藩体制の合法手段をとった。しかし、それらの合法手段からは何もえられなかつた。そこで最後に残された直訴になったという筋道が以上の経過から考えられることである。

しかし、秋田藩戦後処理はさらに新しい要望をかかえながら明治3年2月段階までもちこされることになる。いわゆる贖札騒動とよばれる一揆であつて、その要望は後述するが、従来確認されている地域はつぎの通りである<sup>37)</sup>。2月13日仙北郡2,400人～3,400人、同月8・9日平鹿郡車長根350人、同11～12日浅舞1,200人、同17～18日増田山内670人、また羽後町地域山内6か村および堀廻村も参加し角間川まで行く。この中で雄勝郡東西山間郡の百姓が動いていることに注目したい。すなわち、幕藩体制の原則は石高制であるといわれるが、その限りにおいて、米生産の少ないこの地域は石高制の底辺に存在するといつてよい。また、代替としての商品生産の剰余は地方市場町商人に吸収されている。このような幕藩制下の地域格差のもとに住む百姓は、生きる権利を他地域よりも強く主張したものと考えられる。さて、つぎに具体的な動きをみよう。平鹿郡今宿村では2月12日「村々騒動札不通用之ため徒党相企出府ニ付」小人が目先をつれて鎮圧にきている<sup>37)</sup>。しかし、2月18日には「雄勝郡百姓共多人数騒立大沢船場江相詰右之内四百人余深井村々造山村迄参候由知らせ参親郷親方目先共召連<sup>34)</sup>」深井村に向つた、としている。また別の記録でも「同十八日早朝百姓一き上浦衆千人斗り参ル様子相聞江郷中寄合致居候処四ツ頃式百人余参り夕方迄千人余参<sup>34)</sup>」とあり、これらは雄勝郡羽後町地域の集団と考えられる。今宿・沼館村の村役人は多人数を収容できる場所として蔵伝寺などをあて、豪農商から米・漬物を出させ食事させている。18日にはさらに第2波300人がきているが、収容施設・食事で苦勞している。19日朝には角間川に向つて出発している。このように村役人達は一揆勢がことなきように手配した。地元の動きとしては、17日東里村が「騒立」てたが御詰合より米30俵助成したため落着いたと報じている。その米は「極窮・難波」の者へ玄米1人1日3合

を10日間支給し、米の提出はその村の「可成者」より助成させよと役人が命じている。ところで地元今宿村では20日百姓が「となり触」で蔵伝寺で寄合し、肝煎に訴願したが、沼館村でも訴願があるらしいのでそれを聞いた上で処理することにして却下している。沼館村の小百姓一統より郷中にあてた訴願の主なものを原文であげると、

一去己ノ御毛引之外百苻ニ付壹表宛御拜借被仰付度候  
尤も無利息ニ而五ヶ年割ニ御返済致度事

一御田地書入永代共村方并ニ他郷江仕候分共元安堵代  
拾ヶ年割ニて受返し可成致事

一銀札不通用ニ付甚々難波ニ相及以来真偽共御郷中  
之御見済印を以是迄之通り百文者百文ニ無指支通用可  
致様被下候事

一村方一統借物之義何方なり共一躰拾ヶ年割ニて返済  
致度尤も無利足之勘定に相成候様被下候事

その外、取引の際永銀指留、駅場夫伝馬角間川行玄米式升で継立、手当を小間居に全部支給、去辰7月中梅津様調達分35両返済、郷山杉木総百姓に切らせることなどあり、これの要旨は隣村今宿村でも報じている。概して経済的要望であるが、当村独自の要望もみられ、他村においても独自の要望の例があつた<sup>39)</sup>。また、この中で原文3項目をあげたのは贖札騒動と同じ要望であり、騒動には至らないが基本的には同歩調とみてよいであろう。さらに、この原文1項と4項は明治元年の戦後にも要望があつた事項であり、とくに4項は徳政要求の一步前のものと考えられる。そうした点で2項も同じ性格であるが、借銀・土地を売った代銀だけは返済するという百姓の「律義」さが表現されている。2項は贖札騒動勢の要望にもみられるが、この土地返還要望が明治2年に初めてできたのではない<sup>40)</sup>。しかし、一村だけでなく、広範にわたつてこの要望がでていたことは注目に値する。百姓が自分で耕作する土地を自分で所有することを宣言したことは歴史的に意義深いことである。これはもはや、戊辰戦争の戦後処理の問題ではなく、百姓が新しい農村社会をつくり変えようとする基本的要望であつた。



(注)

- 1 「秋田戊辰戦争覚書―辻辰之助とその同盟について―」秋大史学第四号  
「戊辰内乱期の農民諸隊論―日本近代文学館所蔵小杉文書の紹介を兼ねて―」秋大史学23
- 2 「羽後町郷土史」(戊辰戦争)  
「近代秋田の歴史と民衆」(戊辰戦争と農民)
- 3 秋田県行政管理課所蔵
- 4 少数であるが同一人名が2回記載されている場合がある。例一角館町(角館町横町)画工・平福文池。また逆に秋田郡外川原村一村家頭35人・同郡根下戸郷中とあるが、それぞれ1件と計算した。
- 5
 

享保16年高	享保15年戸数
秋田郡 84,625 石	15,599 戸
仙北郡 93,325 石	12,151 戸
平鹿郡 60,640 石	9,197 戸
雄勝郡 55,194 石	9,144 戸

 高は「秋田県史資料 近世編上」  
戸数は「秋田叢書第二巻」(六郷部色記)
- 6 平鹿郡醍醐村伊藤伝之助・同村藤原多左エ門など
- 7 佐藤徳治郎「ふるさとの戊辰戦」なお、紙芝居は比内町文化財保護委員会に委託保存されている。
- 8 (7)に同じ
- 9 「秋田勤王史料故辻辰之助事蹟書」の中にある9月16日七滝山に会合した横手平田吉蔵は賞状がある。
- 10 雄勝郡羽後町元西 麓 土田伊助氏蔵
- 11 一卷の武士クラスに記載
- 12 前掲「羽後町郷土史」
- 13 雄勝郡雄勝町院内江島勝太郎氏所蔵「上 平岡慶治 前田敬之進手続書」
- 14 大館市史編さん調査資料第十集「茂木筑後家蔵文書 「十二所口戊辰戦争関係文書」
- 15 雄勝郡雄勝町横堀戸部林太郎氏蔵
- 16 「山本町史」資料集 169 湊 晴成文書(覚)
- 17 「同上」167 同文書(乍恐書附を以奉申候)
- 18 十文字地方又研究会編集「仙賊の大砲掠奪隠匿事件の顛末」高橋十右エ門稿「戊辰役大砲奪取一件文書外」
- 19 平鹿郡平鹿町下鍋倉 吉田久之氏蔵
- 20 平鹿郡十文字町中の村 柴田伝一氏蔵
- 21 平鹿郡雄物川町小沢練吉氏蔵「才中晴雨諸日記」雄物川町郷土史編纂会「雄物川町郷土史資料」第8集に収録
- 22 同町塩田康之氏蔵「御評定方様へ手紙形り書願書上之扣」
- 23 湯沢市田町長尾菊造氏蔵
- 24 「山本町史」佐竹義脩の御巡察と誼兵隊
- 25 「秋田勤王史料故辻辰之助事蹟書」
- 26 「秋田県史近世編下」原文は「飛耳記」(川井小六様被仰立書之写)で「秋田県史資料明治編上」に収録されている。
- 27 平鹿郡平鹿町樽見内柴田新一氏蔵「嘉永7年新家移住ヶ所書写外ニ品々聞書見書伝ヒ書追加」
- 28 「近代秋田の歴史と民衆」
- 29 「享保郡邑記」では151戸
- 30 雄物川町塩田康之氏蔵「乍恐書附以奉願上候」
- 31 「享保郡邑記」では39戸
- 32 (30)同氏蔵「乍恐口上書を以奉願上候御事」
- 33 「羽後町郷土史」
- 34 雄物川町今宿佐々木輔四郎氏旧蔵「文久元治明治初年迄日記」
- 35 湯沢市立図書館蔵「山脇日記」
- 36 佐々木潤之介氏「世直し」
- 37 前掲小沢練吉氏蔵「廻文扣」より
- 38 (30)同氏蔵「乍恐口上書ヲ以願上候御事」
- 39 「近代秋田の歴史と民衆」
- 40 佐藤清一郎「藩制末期・秋田藩に流通した預り札とその弊害について」(秋大史学23)
- 41 「羽後町郷土史」西馬音内堀廻村では同前郷村所持の田地100石と山林を買いもどす計画をもっていた。

調査に関しては、大館市水沢文則氏、比内町教委、羽後町柿崎隆興氏、湯沢市佐々木千代治氏、雄勝町教委、雄勝町戸部得郎氏、同斎藤誠一氏、同江島勝太郎氏のご協力をえた。末筆ながら感謝したい。